

開校10周年記念式典における樋口恵子氏の講演

「再びの学びの中で育てたもの、育つもの」要録

記念式典で行われた樋口恵子氏の講演の録音速記全文は本紙9ページ分にも亘るため、“過ぎた10年、来るべき10年”のテーマに絞って、広報部の責任で要録に整理したものです。

都知事選出馬のこと

個人の生き方とか在り方には何が降ってくるかわかりませんね、私まさかことし70歳で都知事選に出ようとは夢にも思わなかったわよ。なんてんたって告示の直前に決心して17日ですからね、あちら310万票、私82万票。ですがあちら現職ってのは4年間選挙運動してるようなもんですからね、あちら4年間で310万票、こちら17日で82万票（拍手）。一日当りの集票能力はこちらの方が高いや。でこの話が出たついでにCM。“「平和ボケおばさん」七十歳の熱き挑戦！、チャレンジ”という本が出ておりますので、どうぞこれを読んで頂ければ、私がなぜ出なければならなくなったかということが分ります。

長く生きた者の責任

歳を取った方はつい「今時の若者は…」と言いたくなります。今時の若者に言いたいことは山ほどございます。しかしその今時の若者を作ったのは私たちなんです。どんなに若者や今の世の中に問題があろうと、それはより長く生きてきた者の側に責任があるのです。私たちは、生きてある限り、これから一票の権利を持ち、生涯現役一有権者であり、一市民である。長く生き延びることができたことへの感謝の思いも込めて、次の世代に持続可能な本当の意味でより豊かに生きることのできる可能性を持った社会を目指す責任を持っているわけです。

不況の10年、危険な10年

きょうは10周年ということですから、この10年が一体どういう10年だったか簡単に私なりの分析を申し上げたいと思います。1994年からの10年は、ある意味で評価は定まっております。アメリカのエコノミストは“ロスト・ディケード（失われた10年）”と言います。確かに日本は、この不況から未だに脱することができず、今までこれだと言う決め手は出てない。だから未だ本当の景気回復とは言えないようです。

日本は今は大変な借金を抱え、次代にツケを回す世界先進国でもまれな国になっている。小泉さんでなくたって構造改革はしていかなければならない。その意

味で、経済・財政・金融の側面から失われた10年と言うのは当たっていることは事実でありまして、これが一つの面です。

別の側面から見ると、ある意味で戦争がし易くなった、危険な10年と言うことができます。

冷戦構造の崩壊による国際情勢の変化によって、有事3法、有事立法があつという間に作られた。

ちょっと危機感を感じるぐらいな偏狭なナショナリズム、異論を許さない考え方がすーと通って行き、安全保障に関する法律があつという間に通り、一方で通信傍受法とか、住基ネット法とか個人情報保護法とか、個人のプライバシーを権力の側がコントロールし易い法律があつという間にできてしまった10年でもあったとも言えます。

もう一つの見方の10年

さて、この不況の10年と、危険の10年を見たとき、私たちは陰陰滅滅としてくることばかり。その割に私が元気なのはなぜか、と言いますと、私はこの10年間に実はもう一つの見方をしているのであります。ここに掲げられたスローガン「再び学んで他のために」のように衣食足りて他人の存在が視野に入るようになりました。ふと気が付いたら地球が丸ごと見えるようになった。この10年、思えば目を見張るほど大きな変化でございます。

これからお話する第3の見方の10年の年表を改めて作ってみたら、本当に希望が湧いてくる。名付けて言えば、市民の10年、あるいはパートナーシップの10年、と言っていりかも知れません。

異質の、立場が違い、今までは地位の違いがあったグループの対等なパートナーシップの出発がこの10年でございます。特に、95年の阪神淡路大震災、このことがきっかけで、日本中の、あるいは世界の人々が行政では決してできないことに向けて、お互いに支え合うべく、立ち上がったのであります。ここまで日本の様々な民間のボランティア活動、NGO活動が、老若男女を問わず広がってきたのかと、目を見張る思いもいたします。そのときがきっかけとなって、19



98年には特定非営利活動促進法、世に言うNPO法とも言われる法律がスタートします。これによって如何に多くのNPOが生まれたことでしょうか。この神戸市シルバーカレッジの卒業生あるいはその周辺の方々の中にもNPO法人をいくつも立上げていると言う様子を拝見しております。

NPO法人なんて作って地域活動する定年退職後の男の人が本当に増えました。

10年で変わった男性群

先だって企業を定年退職したあるグループの中で活動報告会があり、付随して川柳の募集ってのがあったんですよ。第一位の川柳ってのは大企業を定年退職して、しばらく経った方の川柳でして、「朝ボラに行く顔揃う縄暖簾」。(笑)

朝ボラって言うのは朝のボランティアね。今までは会社の帰りに縄暖簾という過ごし方をしてたんですが、近頃はその日の夕方揃うのは「朝ボラに行く顔揃う縄暖簾」。いいですね。10年前は大分違いました。シルバーカレッジの開校式でご披露したかも分りませんが、ある人のご夫君が、ボランティアなさった。理工系の方なんで、運転がうまいし、カーボラボランティアと言う、障害のある方やお歳を召した方をどこかへお連れする。声が掛かると彼は「運転だけはするけれど、障害を持つ方の乗降の手助けは、俺、こわくて嫌だ」と言う。奥様も消費者活動で大変忙しい人なんですけれど、カーボラのお声が掛かると自分の活動を中止しても助手席に乗り込む。運転以外はすべて奥様がやっている。付添いボランティアって有名になっている。私は五七五で読むだけなんですけど、「ボランティア妻が付き添う駄目おやじ」。(笑)

明らかにこの10何年間、男性の老いの生き方、サラリーマンOBの生き方が変わってきている。ずっと日本近代百何十年続いてきた官尊民卑の中で、民の立場をこれだけはっきり認めた初めての法律があつた特定非営利活動促進法であります。官尊民卑から官、民の対等なパートナー

シップ、と言うのが一つの大きな変化であります。

地方分権の拡大の流れ

第2に1995年に地方分権推進法という5年の時限立法ができました。いま神戸市長さんからのご挨拶にもあったように、市役所だけでは何もできません。市民の方に参画して頂いてこの地域を良くすることができるのです。地方分権各法が、2000年4月から施行されています。かつては機関委任事務と言って国が決めた通りにしなければならなかった都道府県の事務の6割が自治事務といって、自分たちで条例を制定する権利ができるものになりました。都道府県すべての自治体の条例制定権というのがものすごく幅が広がりました。

これは、百三十年続いてきた中央集権の行政に対する大きな変化であり、2000年4月地方分権一括法というのできて、国が上で、地方が下、上下主従の関係であった国と地方自治体を対等なパートナーシップに変えていく第一歩がここで作られたわけでございます。

家族の中も対等関係が...

高齢化ということは、言ってみれば家族の構造が変ることです。かつて親の介護は家族の役目である、特に嫁の役目でありましたけれど、それは人生50年、60年社会でありまして、介護する嫁さんは20代から30代が普通でございます。それどころか人生の短い社会には長男の家に嫁いだとしても、もうすでに親はいないと言う人がかなりの数に達していたのでございます。

面白いもので高齢化社会というものは、なぜか長生きする女性のために起きた問題が結果としては男性の問題にも広がっていくのでございます。そして90年代の初めには男性も取れる育児・介護休業制度が確立されて参りました。日本経団連の会長さんが仕事と家庭生活のバランスということを言い出し、そしてこの10年の間に、仕事と子育て両立支援策に関する専門調査会の報告書を提出し、このことはついこの前の国会で次世代育成支援法として、女の人には育児休業を取る人8割を指導し、取っていないお父さんたちにも育児休業の取得率をまず1割を目指すという目標数値を入れながら、仕事と子育て、仕事と家庭のバランスを取る方向性がやっと日本にも示されてきたと言うことは、99年男女共同参画社会基本法が衆参両院満場一致でできたことを含めまして、これは男性と女性との人

生90年、100年社会に至る対等なパートナーシップの形成と言うことです。

高齢者の性差区分率は人口比よりやはり女性の方が多いのであります。所得も年金も女性の方がより貧しく、老いて、個人の資産を失い易いのはやはり女性の側であります。

このまま行きますと、老いて貧しいお婆さんの群れが日本社会に大量発生し兼ねない危険を持っているのであります。それを防ぐためには、今から男性と女性に対等に社会に参画し、共々に支え合っていくと言う男女共同参画が人生100年の必然であります。国と地方が、官と民が、男性と女性に対等になる幾つもの法律ができた。これはひとえに民主主義の成熟によって、民の側が色んな運動をし、活動をし、現状を変えて行った結果です。このパートナーシップの10年を更に人生100年型社会を作る10年、そしてこれからの10年を生きて行くのではないかと提言したいと思っております。

2050年になると...

実は去年のお正月、厚生労働省の国立社会保障人口問題研究所は2050年の人口将来推計をかなり詳細に発表しました。で、数字だけ申し上げますと、2050年で65歳以上人口はざっと36%になります。今は大体18%ですから65歳以上人口が今の2倍いることになります。人口の4割が65歳以上です。特に女性は重要な地位を占めます。(笑)

ご来賓のご祝辞にもございましたが、現在平均寿命は男性が78、女性が85ですが、2050年の推計は、男性が81、女性が89と述べております。これが当れば、男女の平均寿命の差はまた1年半開きますから、そもそも男性女性の数のバランスが崩れるのは高齢者なんです。65歳未満はほぼ男女が5対5なんです。65歳以上になりますと平均寿命の差がものを言ってくるまして、65歳で言うと女6に対して男4、80歳では2対1です。

男は死ぬ要因が多い!?

去年の秋に行われた公衆衛生学会で、愛媛大学医学部公衆衛生教室の発表がちょっとした話題になりました。松山市の4千人位を対象とした8年位前に始まった調査なんです。重篤な疾病のないお年寄りを登録して、まずは健康と言うお年寄りのその後の経過を見守って、6年半も経つと幾人かは亡くなってるんです。何で亡くなったか死因リスク分析をする

と、男性は4つ位共通分子がありました。大酒飲み(笑)ね、大タバコ飲み。それからもともと病気ってほどじゃないけれど高血圧の状況。4番目が、妻がいないこと。今度は女性の方の死因分析、共通リスク要因は1個しきやない。何だと思えますか。「夫がいること」(爆笑)。

若いうちはね、なかなか病気で死なないけれど、歳を取るとやっぱり自分もガンに侵されたり、色々検査に行かなきゃならないときもある、無理の利かない体になっているのは男も女も同じなんです。そのときに無理をするから、あるいは受診する機会がなくて悪性の病気の発見が遅れて先に死んじゃう。そうすると身の回りのこともできない夫は自棄酒飲んでまたすぐ死んじゃう。(笑)

こういう社会がいいですか。自分の病気の療養もできず、夫の目を怖れながら早く死んでいく妻も哀れなら、自分の身の回りのこと一つできず、妻が倒れれば後を追うように死んで行く夫もまた哀れであります。この人生100年時代、より長く共に生きる時間が長いことを、共に喜び合えることが大事な世紀にしようではありませんか。

じっと見ている人たちがいる

21世紀を名付けるならそれは明らかに高齢者の世紀です。人口の4割近くを占める高齢者が健康か不健康か、前向きか後ろ向きか、リッチかブアか、自律型か依存型か、社会参画型か引籠もり型か、高齢者の動向は日本の21世紀半ばを左右するものであります。65歳以上のきょうの皆様、そんな時に生きてないからいいわと言って私の言うことをお聞きなるとしたらとんでもないことになります。そのときの主役はいま二十歳(はたち)とかそういう年齢の人です。その人たちと今私たちは共に生きている。そして今私たちがどういう人生100年90年の生き方のモデルを作るか、みんなじっと見ているのです。ですから人生90年100年を生きるために、最後のラストステージを、第三のステージをどのように生きるかを作っていくのは私たちでありまして、それを見ながらまた人口の4割を占めるときの高齢者である若い人々が後に続いて生きて行くのでありまして、これを「老婆(ローバ)や、老爺(ローヤ)は一日にして成らず。すべての道は老婆(ローバ)、老爺(ローヤ)に通ずる」と言うのであります。ご静聴ありがとうございます。(拍手)